慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	明治少年節用・少女節用
Sub Title	Meiji shonen setsuyo, shojo setsuyo
Author	関場, 武(Sekiba, Takeshi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1989
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.55, (1989. 3) ,p.36- 78
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	西村享教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00550001-0036

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

明治少年節用・少女節用

関場

武

辿る作業の一環として、 江戸∼明治にかけて編纂・刊行された児童向けの節用類を取りあげ、紹介と考察を はないので、今後の調査に俟たねばならないのであるが……。 が、それは何であったのであろうか。 残念乍ら未詳である。 勿論、今回取り上げたものが全てというわけで 「少女節用」というのが家にあって覗いて見たことが ある けれ ど、君の言うそれとはちがうとおっしゃった する個所があることをお断りしておく。それにしても、拙稿の構想をお話した時、西村さんが、子供の頃、 行なったものである。なお、「明治少年節用」として「三色旗」四八五号(昭3・8)に寄せた拙稿と一部重複 本稿は、本来有している辞彙・辞典的な機能を拡げ、 事彙・事典的になって行った一群の節用集の流れを

明治少年節用

年(一八八七)年六月十五日、時に数えで五十三歳であった越後長岡出身の大橋佐平によって、東京本郷弓町二丁目の六 明治期の出版ジャーナリズムを考える上で忘れることのできない出版社の一つに、博文館がある。 同社は、 明治二十

綱の 郎 雑著にと、その盛業ぶりを誇ったのである。 丁目へと社屋を遷し、長男新太郎らの経営のもと、とりわけ明治二十年代から四十年代にかけて、 畳二た間の借家に創設された を数えるのである。 ている辞書類にしても、 主要記事を抄録したもので、 「大橋佐平翁傳」)。そのためすぐに店が狭隘となり、同月の末に日本橋区本石三丁目、さらに二十五年には同 雑誌「太陽」「少年世界」「文藝俱楽部」、帝國文庫、日本歌學全書、英嘉温知叢書、日本文學全書、それに佐々木信 「歌の栞」、大和田建樹の「謡曲通解」等々、 思い浮ぶままに幾つもあげて行くことができる。 石川鴻齋の「鎌草日本大玉篇」「新撰日本字典」、 一冊十銭という廉価も手伝って忽ち一万部余りを売尽すという大当りを取った(坪谷善四 (「博文館小史」)。 同社の最初の刊行物は 例えば小波のお伽噺・昔噺シリーズは皆博文館より刊行されたものである 「日本大家論集」という既刊の各種専門雑誌の 山田美妙の「萬國人名辭書」等、 雑誌に叢書物に啓蒙 筆者が興味を有っ 二十点近く 本町三

さて、その博文館の夥しい出版物の中に、「明治少年節用」と題する、三六判(=新書判)六百二十六頁の少年向け啓

村田谷小櫻小舟桃波

合編

東 亰

朙治少丰節用 博文館蔵 版 全 蒙百科がある。 年世界、」の広告を出し、 「廿」に、「八」を消して「一」にし、「大橋」の小判形朱印を捺して あろう。奥付は単枠内に界線を置いて上方に「少年雑誌界之大王 あるから、 「五」を消して墨筆で「八」と訂し、発行日の「十八日」の「十」を 但し国会図書館に献納された本によると、 実際の印刷と発行は各々十一月十八日と廿一日だったので 同書は明治三十六年十一月十五日印刷、 下方飾り枠内に刊記を載せる。 印刷日の「十五日」 同十八日の発 刊記は右方 の

前 沭 0 印 刷 発 行 年 庰 日 を 行 に 分け ć 記 そ ぁ 下 に 定 價 金 七 拾 Ŧī. 銭 の 価 格 表 示 左 方に

| | | | | | 輯 誀 年 刷 所 世 界 編 **東京市牛** 輯 部 |區市ケ谷加賀町 發 行 者 東京市日 丁月十二 口本橋區 番 地 本町三丁目 會社秀英 八番 舎 地 第 ___ 大 工 橋 場 新 發兌 太 郎 元 飣 本町 三郎 刷 丁本 東京市牛 日區 博 E文館 八區市ケ

論 見るように、 年 ぁ Ħ. 月 る。 **の** 二 の Ł £ 名 版 版本 本に 扉では巖谷小波 〇 五 は 当 よっ 囙 時博文館 刷者 て紹 糎 小 介す 古見繁蔵 0 口 á。 武田 編集記者とし は 三方とも |櫻桃 表 紙 印 は 刷 濃黄 木村小舟の三 紅色に染め、 所 て小波を輔 緑 博文館印 色 ク p 一名。 けて ス装、 屝 刷 は 影。 V 紺 奥付では 地 裾に た硯友社 管見に入っ 12 白 金 ヌ で 少年世 案 キ 梅 花模 Ó で 文学者 た初版 編 昇 者 様 編 を 輯部 書名 本は 押 で あ す。 の る 改装なの 編 版 背文字 カュ となっ 6 元を記 は で、 齟 て 齬 す。 金 VI 装幀 は る 書 無 編 が 名 者 は V 明治 は O 小 4 波 記 図 Ξ + 版 載 は 勿 九

は E めに 皇太子 皇 孫 消 像 写真 葉、 各 国 Þ 旗 . 海 軍 高 等 武 官 朖 装 . 陸 軍 高 筡 武 官 服 装等 Ó 色 刷 ŋ 口 絵と公

0 次

弘

新た於*益を多た夙とを 知しそ る 者せられしが、是れた童の教育に心思なったがない。 を繋ぎる 童さ 0 られたるものできれたるものできませい。 教は 育り ほ تع 困 はこたび からるに、更 がいると、更 を編著せられ を編著せられ 性情を研究し、所謂御されている。 はいます。はなき、いはいまれている。 はいます。はなき、いはいまれている。 一般にはいることを云へばいる。 一般にはいることを云へばいる。

知がけ

る

る多大なる。ただなる書を

男爵. 加藤弘之の 明治三十六年十月付の 「はしがき」二頁分と、

近着 では無いか。然し乍ら、 をかきませれか。然し乍ら、 はたまがくにせられんぶんがく ほうこう を編纂するもの、 煙暴するもの、蓋しその缺所を補はうと云ふ、 修学の参考とも成る可き書籍は、未だ割合に しらがく、ことによります。 ましりあない り、でいかない。 質に著しい勢である。一なない、これである。一はない。 若くは はうと云ふ、微衷の他は無いので、 未だ割合に少いのである。茲に、 ・まだ割合に少いのである。茲に ・まだ割合に少いのである。茲に ・まだ割合に少いのである。茲に なまでする。 ないのである。茲に ないのである。茲に ないのである。茲に ないのである。茲に ないのである。茲に ないのである。 ない

は、

に所謂る

٦

V

キシコン」、

7

エンサイクロペヂヤ』

の類であるが ある。茲に生等の浅学を顧みず、、娯楽、歌のの用に供するもので、、娯楽、歌の用に供するもので、 て科目別を用るの如く、イ 掛る時こそ、 字彙とも云ふべき、 『節用』に倣つた 今この書を編むに當つて、 のである。 イロハ引の法を採らず、 元素が 1 V た P 0 ロハ引の法に依らられ、だいまっき。大節用の編纂にて、大節用の編纂に のは、 『節用』 で、 なる者は、西 この『 依らうとE また壮な 取と

B 本

11 1 本党 と云う 國公

の方にある鳥國で、毎朝出る日か、亞細亞洲の中でも、一番東 この図の方から上ると云う

灭 文

П

本

歷 史

> 本 A

> > 50

(後略

天 30

のものであるかと云太事を究めるので。その中にはまうな天躰を知る母間で、太陽とはどんなものであるか、地球とはどんな形でな天体を知る母間で、太陽とはどんなものであるか、天文學と云ふのは、太陽、月、星、地球と云つたや天文學と云ふのは、太陽、月、星、地球と云つたや

そ 0 云 (紫色刷、 々という明治三十六年天長節の日付 0 「緒言」 続いて明治二十三年十月三十日付の ウラ 七版本は深紅色刷)や皇室 K 三頁分(七版本は紫色刷) は 時の太鼓に鶏の番と雛 が 覧、 あ 0 勅 羽 0

日記 が入り、 お、 組五百五十頁分。 族 を持った兵士 覧、 懐中 この次に 緒言ウの図が地球儀とトンボに替り、 天皇御歴代が合せて十六頁。さらに目次が十八頁分あって、本文に入る。本文は上方に鼇頭欄があるタテ二段 日記等の広告、 の カットに 「少年讀本」 末に 「和漢洋對照年表」十七頁分があり、 になり、 全二十一頁分がある。 や小波の「日本お伽噺」「日本昔噺」、「寶興明治節用大全」 広告が十三頁分と少なくなっている等の異同が 和漢洋對照年表の末にあった明治三十七年の大祭祝日表が削られ 因に明治三十九年の七版本は、 次に 「明治三十七年日曜大祭祝日表」一頁分を付す。 ある。 口絵に『三十八年式軍服及肩章」 第八版、 明治三十七年度用当用 の 図 な

は即ちこの書の謂也」 本文の内容であるが、 と宣伝しているように、たしかに色々な情報が載っている。 後述の 「明治少女節用」 巻末の広告で、 本書の内容を紹介して 全体は「本科」と「別科」 「日本少年座 右の寶典と に分かれ、

本科は更に

地文、 作文、 地理、 物理、 和 歌 **俳諧** 化学、 動物、 植物、 工業、 農業、 商業、 数学、 音楽、 遊戯、 體操、

の二十二科に分か れ る。 そし て 例 えば

遊戯 は先づ身躰を丈夫にし、心持を爽快ならし星、流星の五種になる。(天文科-5) よっぱ から云ふと、太陽も、月も、地球もまた星と呼ばから云ふと、太陽も、月も、地球もまた星と呼ば とは夜になると、 月ぽぴん 3、地球もまた星と呼ばれるので、此星を大きく区別して見ると、恒星、遊星、月、彗き、ちょう ほうょ いっぱ いっぱ しょく 大空に光つて居る金米糖のやうなものばかりを云ふのでは決してない。天文学の上、 ままはら ひき ね こんべいち

身の實習にもなるのである。遊戲は先づ身躰を丈夫に (遊戯科-1) め、 品性を高尚にするもので、 随つて遊戯は體育にも な

れ

修ら

福 41

軍旗や軍服が出、 つ た説明をしているものである。 日 清 本文に軍事科があるが、 日露戦役に際し各々 右の例からも窺われるように、 實記や 太平洋戦争時に於けるそれに比べれば、 「日露戦争寫真畫報」 を出して当て、 その内容水準は決して高くない。 遙におとなしいものである。 率先して国に醵金をしてい なお、 出版元 口 「絵に

残念乍ら当時はそういう時代であった。

別科は、

大祭祝日略解、

少年吟誦用詩歌、

室内遊戯に始まり

法, 寫真術、日本事物起原 (日本の 稱~小説)、 泰西事物始原 (日月蝕~天幕)、 影畫法、 秘傳五十題 (赤切を治し ける法 公し封じゴ

等を経る 引き百題」 て、 遊学の 0) 九十番に、 栞、 福引き百題、 学校一 「明治少年節用」 「明治少年節用集はほ 覧、 少年年中行事、考へ物、 和 漢数字盡に終る二十七種の、 と題を出して、 鳥類飼育法、 「(薪一 東批把梨=ならびはなし)」と種明か 実用 知識 昆蟲採集法、 日用便覧を収め 「明治少年節用集程面白い書物は他に。 世界國勢一 Ź ٧١ 斑 る。 しをし、 そのう 11 9

物」の二十一と二十三で、 んとに。 (徳川家の二忠臣)」 という答えを用意する等の、

お

遊びも混じえている。

伽三十六佳選、 頭書欄に当る 鴉と白鳥~子供と蛙)、 「鼇頭」 日本歴史、 世界歴史、 日本お伽噺(桃太郎の話~天の岩戸の話 支那歴史、 東西立志談の六種を収載する。 二十五話)、 そのうちの日本お イソツプ物語 伽

噺

噺

は、

の イ 児童向け雑誌 ソップ等は、 明治二十 「少年世界」 四年 の主筆として活躍したほか、 月、 博文館の少年文学叢書第 「少女世界」 編に っこが . Þ 「幼年世界」 ね丸」 を発表し、 も主宰。 二十八年以降 カゝ た わら、 は 日本 同 社刊行 お伽

どうか等を検討する必要があろう。また、 や日本昔噺、 うより近代日本の児童文学界に大きな足跡を遺した巌谷小波の著作類と比較し、この部分が彼自身の手に成ったものか 明治お伽噺、 世界お伽噺、 世界お伽文庫といった厖大なシリーズを続々と企画・出版して、 緒言で 明治の、

小波が少年文学に對する、一 一家の假名遣法を用ひたのである。

と言っているように、 本科と別科はいわゆる歴史的仮名遣を採って記述されているが、この鼇頭は

其時わもう夜で、 きなり綱の頭をつかみ、 でつかみ、上え引きあげようとしました。しかも雨がザア/〜降つて居ましたが、 やがて羅生門の前まで來ますと、 (日本お伽噺15 「羅生門の話」) 案の定鬼が出て來て、

った具合に、 当時色々と議論があった仮名遣論の中で、 小波が提唱した彼一流の仮名表記法に拠っているのが、 特

明治少女節用・家庭節用

色の一つでもある。

に、 行する。 四年後、 江戸に続く明治の教育は、男子と女子とを截然と区別するところにあった。 装幀・内容とも明らかに 同書は明治四十(一九〇七)年八月の刊。 明治三十九年九月創刊の雑誌「少女世界」が順調に部数を伸ばしたのを機に、 「明治少年節用」を意識している。 次に引く「緒言」 すなわち緒言に言う。 (明治四十年中元 男の児向けの 編者識)の一節からもわかるよう 博文館は 「明治少年節用」 「明治少女節用」を刊 が出た約

俟*體で部*に つ 裁は員ね。 少年が 員は、本書編纂の計畫を立て、Washing の は、元というの は、元というのは、元というのは、元というのは、元というのは、元というの は、元というの は、元というの は、一はの さいます。 さいました。 まったまかった。 まったまかった。 まったまかった。 まったまかったまかった。 まったまかったまかった。 な、我が、我が、 少きなん。一 一切少年節用に準じて 元より 少女は でめに、幾分でも校外の師友たる實を挙げ得るならば、2年じて居る。畢竟、少年』を記させれば、『少女』、18年代の「は、18年代」を記させれば、『少女』、18年代の「は、18年代」を記させれば、『少女』、18年代の「は、18年代」を記させれば、『少女』とは、18年代の「は、18年代を告げる。此故に、客年九月、少女儿より然るべき事と信ずる。此故に、客年九月、少女儿より然るべき事と信ずる。此故に、客年九月、少女儿より然るべき事と信ずる。此故に、客年九月、少女儿より然るべき事と信ずる。此故に、客年九月、少女儿より然 の為め に のあ める以上、 客年九月、少女世界創刊の きゃくねく けつ せうちょせ かいきっかん した、**妻**に出版した『少年節 いた。 きき しゅつばん 『少年節 ば、 は、編者の満足此上なる。またである。正の妹である。正 若し夫れ編輯の 0 無なも

す。 題 8 少女節用 云 一々と。 編者名は扉は号で、 同 ľ 名の であ の判型は少年節用と同じ三六判。 つまり る み。 ここで、 (図版参照)。 但し少年節用 奥付は本名で出 少年節用と対に 小 口 が篆隷体であるのに対して、女らしさということで行草体になってい は 少年節用 す。 なるも 竪一七・九、 即ち小波巌谷季雄と笠峰 ٤ 同じ のとし く紅色染め、 て本書 横一〇·八糎。 が 編纂されたことをは 扉も同じく紺地 沼田藤次、 表紙は空色クロ 竹貫直人、 に白ヌキ っきりと ス装、 で 小舟木村定次郎 裾に金で撫子模様。 語 編者 0 7 VI 書 る。 る 名 0 これ 7 蔵 0 版 兀 は 元 扉も内 背 を 文字 そ 記 奥

厳谷 竹尖直へ .j. 東 议 本村小舟。译 藏版

年 は、 少女節用奥付 0 博文館印刷所印 編者を 八 は単枠内上部 八月十五 東京 橋區本町 博文館」東京市日本博文館」 列 市 日 小 發行と記 石 に右 定價金八拾五銭」 発行者は 行 區 |横書きで明治 ٢ の名を出す。 うある。 少年節 その下方を枠で囲 百 八番 そして更に界線を置 用と同 と記し、 四 地 十年八月 0 じく 市 JII 界線を置 七作。 大橋 八 0 日印 て、 新 太郎。 いて左に 右方 V 刷 て左 明 に 方 K 印 に 刷 四 明 名 治 +

治

几

内容は、

はじめに皇太子妃殿下以

少女立志談

話を、此所で紹介しようと云う に當つて、まづ第一番に舉げな が澤山あります。今その人々の 我が歩わ、昔からえらい婦人 ▲神功皇后

科

1 1 7T:

たならば、一生涯非常に不幸な目にあはなければなりたならば、一生涯非常に不幸な目にあはなければなり、技趣がよく出来ましても、もし愛情が足りなかつり、技趣がよく出来ましても、もし愛情が足りなかつといいではならぬものは、やさしい愛情であります。これをはないというなどのは、やさしい愛情でありませるとから、死ぬまで、少女と愛情、女子が生れ落つるとから、死ぬまで、

田歌子の題詠二葉を付けて権威づけを図 れに公爵夫人鍋島栄子と学習院女学部長下 用具・旗と勲章・各国々旗、 り口絵は、 流五名家」の肖像写真、合せて二葉。色刷 鍋島栄子・山脇房子・三輪田真佐子の「女 下の皇族の写真と、 服装の変遷・髪の結ひ方・少女 下田歌子・棚橋絢子・ 都合六葉。 そ

9 次いで青色刷りで

数学、家事、技藝、衛生、娯楽に至るまで、あらゆる事項を網羅し、またがく かっと ぎょう きょう こうく いたまうか はいかくべきことを始めとして、立志談、歴史、地理、よそ少女の日常心がくべきことを始めとして、立志談、歴史、地理、 女 ν. al: 少 女 iù

而も少女の修学に、最も適合するやうに記さかがなるお伽噺、文学、博物、理化、となる、のとなるなのではない。 (前略)いま、 その内容を見ますに、

とい

う山

脇房子高等女子実修学校長の明治四十年七月付の「序」

二頁分と、

前引の「緒言」二頁分がある。

次いで勅語

(朱刷り)、 「内外對照年表」六頁分を付す。 皇室 覧、 皇族一 覧が合せて十八頁。 奥付のウラからは さらに目次が十三頁分。 「明治少年節用」 本文部分は鼇頭欄付きタテ二段五百九十八 増 補訂正八版、 少女文庫、 「増訂日本女

禮式大全」等の広告十一頁分がある。

本文は「本科」と「別科」に分かれ、本科の方では

少女心得、 、日本歴史、 地文、天文、 西洋歴史、 禮* 法、 體操遊戱、裁縫、 日本地理、 裁縫、編物、 世界地理、 刺繡、造花、*少女文学、作 花、料理法、植、作文法、植 、植 物、 生、 図、茶の湯、生花、# 鑛物、算術、物理 生花、書畫、物理学、小

英語、農業、軍事

ため の三十 0 修養を謳う本書の の 目を立てる。 編纂意図が明確に出ている。 *印を付したものは少年 節用に無いもの 内容は、 たとえば で、 少女心得、 禮法以下茶の湯に至る各科に、 女子の

増進するやうに、家庭の團欒とい 行き行ふな進 の團欒(といふことを、よく人が言ひますが、皆さんも今の中から、つとめて好機嫌を以て、のが此遊戯の本旨なのですから、決してお傳婆をなすつてはいけません。(體操遊戯―9)と遊戯(此遊戯は殊に諸嬢に適當した體育法で、頗る優美なものであります。規則正しく、しと遊戯(1854年)によるでは、「1854年)により、「1854年)により、「1854年)により、「1854年)により、「1854年)により、「1854年)により、「1854年)により、「1854年)により、「1854年)により、「1854年)により 頗る優美なものであります。 しとやかに、 家が の楽しみを 揃って

(一九一○)年八月、東京市青山穏田にあった女子裁縫高等学院編刊の「家庭節用」 のような具合で、少年節用に比して一段と実用性・教訓性が 増している。 因にこの面を強調して行くと、 に行きつく。 同書は 明治四十三

家 庭 ૃ 绵

に物事に悩み深かるべし、是独人の数へなり。 とくするには、その心損として、常に用意とまやか ばた、マ安らかにたひらなるべく、女子が家庭を聴す 家庭には理風、又は窮風、すべて風の字は不用なれ 家庭の趣味

家屋と身體

り遊して、彼の森々として茂る林は、恰も上帝の樂 仰いで天を見、併して地を見れば、近化の妙質に至 図の如く、弱々たる淡水は、神女の琴瑟の如く、楓

家庭と婦人

規樂と有別に供せられ、夏は動ふべき級医、物すべ 親たる松野にも除情わり、非は否はしき種々の花を き情泉を與へ、仲秋の難能として無限の想を懐しむ

人に與へたる情懐にわらずとせんや、而して否人のいる。 **戦々たる自彗を以て紅塵を消む、是れ實に字面が吾** てす、冬は各自の心もかくわれと云はねばかりに、 る時も、問題の既は樂ましむるに較々たる名川を以 枝息せる世界の國々に行けば、米國には立張なる商

日本にも日光の如名、奈良の如名、人目を眩せしむ るに足るべき建築物わり、これを遊れる人にして、 あり、欧洲には至る所非殿なる宮殿あり、官衙あり 家成は工場が建てられ、印度には古き特別なる寺院

家庭科ともいふべきものゝ大要

弊校が本科として又科外として教授する所の、

所謂

であって(序)、菊判一冊、 十五行タテ二段組一九〇頁。

理、 法、 法、家庭衛生、病人看護、和服裁方、和洋端物裁断 家庭と婦人、女禮式、 生花の心得、茶之湯心得、 手紙の認め方、 日本料理、 西洋禮法、 家庭雑事 支那料理 産前産後、 西洋料

の十六の科目に分けて、実用知識を授ける。

践女学校長)・山脇房子(山脇高等女学校長)らが編集顧問に名を列ねている婦人文庫刊行会から、「節用」と題する巻が 二冊出ている。例えば大正三(一九一四)年六月に婦人文庫の第三巻として出た分は、 また、少女節用に詠草や序を寄せている下田歌子(実 四六判一冊、 四四八頁。

近頃女子教育の缺點として世間に唱へらるゝは、女学校出身者が、實用向の智識に乏しといふ事なり(中略)此の巻 はこゝに意を用ひ、專ら学校教育を補ひて、直に家庭日常の用に應じ得る座右の参考書たらしめんとした……

ので、「女学範」、「和漢筆道手習指南」、「都風俗化粧傳」、「簫料理大全」、「四季漬物早指南」など、江戸時代に著述 と嘉悦孝子(日本女子商業学校学監)がその序文で述べているように、実生活に役立つ知識を供することを目的としたも

刊行された女性向 け教訓書・ 実用書七点を翻刻・ 収載している。

物採集に始 なお、 族 0 少女節用は少年節用に比べ、記述が整理され前進している面もうかがえる。 まり、 讀書案内」四 お邸等、 秘傳(皮膚の色を白くする法、 二十 「少女の讀むべき書物」では 種の日用便覧を掲載している。 聲を美くする法 ~ 石油の臭気を去る法)、 少年節用の如く福引等に便乗しての自己宣伝はしてい また別科では、 化 粧 品 衣服 少女年中行 の心得、 ない 遊学 植 0

0

0

に必要な學問 門や技藝は、 この 5 明治少女節用 0 中に、 べき書物が澤山あります。 大ていは集め記してありますが、 た。 たくきん な ほ この外

として、

三輪

田

真佐子

「新家庭訓」

(博文館)、

下田

「婦女家庭訓」

同)、

坪

内

水

哉

女禮式大全」

同



易林本・巻頭

姫ぬ 皇后さ 宣伝している。 十点のうち八点までを博文館発行のものの中からあげて (佛国)~ナイチンゲール (〜手無し娘23話)、格言三十題、 ~山城の幼女20 鼇 調は、 名、 (英)13名)、少 外国 少女立志談 0 部 和歌三十首、 (〈日本の 女お伽噺 \exists アン、 部〉 (かくや 笑話 ダ アク 神功

天気豫知法の十二種で、

少女立志談、

少女お伽

噺

の仮名

へ物、

謎 々、

吉凶占ひ、

子守歌、

羽子突歌、

手

鞠

歌

47 -

三節用集

集」以後、 さて、 以上四点の書物の表題に採られている 室町時代中期の文明から明応三(一四六九―九四)にかけて成ったイロハ分け兼部門別けの辞書「節用集」 而してその節用集の「節用」とは、 例えば延宝九(一六八一)年五月江戸新板の 「節用」という語であるが、 これは、 文安元(一四四四)年成立の「下学 「増補頭書嘅二行節用集」で

用の二字をとりて此書の題号とせり、節は按ずるに此二字、論語より出たる字なり、 節はほどよくする儀、 はどよくする儀、用は財用の儀也論語学而篇。日、道二千乗、之国、論語学の第一、第二年、大田、 敬い事而信、 節」用而愛」人云云、

とその出典を指摘し

つめて愚蒙のたよりとすれば、人を愛する理あるゆへ、此。以て節用集と名付たる敷るべし、此時ハ、用は財用の儀にハあらざるべし、又、節ム用愛ム人とあれハ、此書ハ用ゆべきの字をあまねく書あるまたの書をみだりに見る事をもちひずして、それ〳〵に用ゆべきの字を、節よく一部に書あつめたるといふ儀なあまたの書をみだりに見る事をもちひずして、それ〳〵に用ゆべきの字を、節よく一部に書あつめたるといふ儀な

田全斎 いている如く、 「俚言集覧」 等の説もあり、 「論語」 学而篇の一節に基くものであると思われるが、 両方の意味が籠められていると考えることもできる。 その時々に応じて用いる意であるとする太 いずれにしてもその内容は

代表的な古版本を例にとると

此節なん

乾ませてカジチャ 雷かが大大 公グチャ 莫太多義 義狼 稲属偏二 放う 稲ナッママ 排 夷パルカラ 巌がり 早朝遅れかりとう (饅頭屋本 稲ず荷り 朝公家と ・比一雑用) 罰がった 金 法学度 (天正十八年本 易林本 伊 乾坤 波 言語進退

(慶長二

年

といった具合で、 な注が付いていたりすることもあるとい 近年流行の大きな活字! 要するに日常使うことばに 早く引ける! 0 如何なる漢字を宛てて表記したらよい 式 た風情 の用字用語字典 の国 語、 別の言い方で言えば和漢辞 中 にはそのものズバ かを知るため IJ 典 Ó なの 「学早引き字典」 で あ の辞書であり、 る。 そう言 (昭 52 0 時に た意味 . 5 `` 簡



降、 大い 慶長二(一五九七)年 を有つものであると言えよう。 して節用 有するも 急字典」 んに刊行され利用されて行くの 「ど忘れ漢字字典」(昭58・9)、「応 至るまで、 に迎えられるところとなり、 江戸時代は勿論明治三十年代 集はその のもあるが (昭59・8)という書名を 辞書 簡便さの 0 代表として盛 の易 に近 林 ゆえ 本以 V そ 6 面

その間、

配

列様式や収録語

が寛文十 (一六七○)年、二行節用の行草体の見出し字の脇に併出してある真字体の漢字に対しても音又は訓を示す── 六 (一六一一)年以降出現し、さらに題号をはじめ収載語彙の若干について簡単な頭注を付した「頭書増補二行節用集」 彙の面で多少の工夫もなされ、 つまり兩方に音や訓が点ぜられているということで「兩點」と称する――「増補頭書輛二行節用集」が延宝九(一六八一) 見出し字に真 (=楷書)草の二体を出す二行節用集 (二体節用、真草二行節用集) が慶長十

年に出る、といった具合に改良が試みられて行く。 そしてまた、 見出し語の分類・配列に際し、 通行の節用集とは逆

六八○)年に刊行されるということもあった。 その一連の工夫の中で特筆さるべきものは、 部門別けの意義分類の方をイロハ分けに優先させた「合類節用集」が、 語彙の検索のし易さを狙ってか延宝八(一 宝曆二(一七五二)年以降

「藝文研究」54号の拙稿「大全早引節用集 数 (音節数)によって引く方式にしたものである。そしてこれが一たび開版されるや、その方式を採るものが急速に広ま 江戸時代後半から明治にかけての節用集の 主流を占めて 行くことになるのである。(早引節用集についての詳細 大全早字引」を参照されたい)。

ところで、その流れに立って、江戸時代後期に出版された節用集類をながめてみると、二つの傾向のあることがわ

あるかを予め知ってい

陸続と刊行されて行った「早引節用集」である。

これは、

節用集がイロハ分けと部門分けとを併用しているため、

検索したい語がどの部門に属するもので

50

部門別けを取り払って、

仮名

ないと、探し出すのに手間暇がかかるので、手早く引けるように、

「蘋耀早引節用集」(宝暦二〈一七五二〉年刊)や「遠華早引節用集」(同七〈一七五七〉年再版)、「寶數引節用集」

る。

すなわち

(天保十五 <一八四四) 年初刊)といった早引節用集類に多く見られるもので、 簡素を旨とし小型化をめざすもの。



大全早引節用集 ·本文(部分)

の二つ のうち 冊

の方向である。

図るもの。

で占められている。

すなわ

巻末に男女相性五行相生相剋 というふうで、 さらに下巻の頭書に往来物・ 英雄競· 大概之図・横濱之図など、 は色刷り)ばかり載せられており、 大日本国郡並御大名付綱道具・算術早学び等三十二だいほといくは、ほんだいやきつけ付綱紋・きんじゅつはやまは 大日本年代記・東都年中行事 総計九十二 種 ち冒頭に大日本国略図 絵図が二十六種 和漢朗詠集等が十九種、 8 の事・名乗字等が十五 0 付 それらに 録が掲載され . 大 日 続い (うち十 本 歳 てい て 時 和 六種 萬国 種 る 種 下 故 漢

(口)

りと雖も、 である」 少年節用」 うになり、それに伴って元来日用的な辞典であった節用集が、より一層実用百科的性格を帯びて行ったのである。「明治 のである。 0 きは、 ているのであるが、 云々と言い、 もともと付録は前にあげた天正十八年本、 皆な能く日常必需の事項を網羅 がその緒言で、 ねく宇宙間の森羅万象を網羅す」と述べているのは、 次に簡単に紹介する それが次第に量を増し、 元常来 『節用』 なる者は、 Ļ 「傳家明治節用大全」 之を坐右に備ふれバ、大抵の事辨すべからざる無し」とし、 ついには本書のように全体の半分近くを付録で占めるものも登場するよ 饅頭屋本、 西洋に所謂る『レキシコン』、若くは『エンサイクロペヂヤ』 が例言で 易林本等の古本節用集にも、 まさにこの手合いの、 「節用の書古今数十種、 実用百科としての節用のことな 既に各々七、二、 其間詳略精 また 疎 九 Ó 「節用 別 0) 類象

四 明治二十三年節用集・寶典明治節用大全

の

である。

女向けということから離れて言うと、 節用集から一気に少年節用・ 少女節用に行く前に、 明治生命が出した年度別の節用集であり、 考察すべき幾つかの書物がある。 博文館の 出した 例えばそれは、 「傳家明治節用大全 少年・少

である。

人は國文社山本謙蔵。 二十三年版を取り上げ搔い摘んで紹介すると、 まず年度別のものを紹介すると、管見に入ったそれは、 とあり、 明治二十三年 非寶品、 全五十六頁。 -四月の刊。 編輯兼発行者は東京市日本橋区南茅場町 内容は、 大きさは竪一八・一、横一二・四糎。 明治廿三年畧曆、 明治二十三年~二十六年にかけての四冊: 皇室 ・皇族に始まり 前表紙中央に大きく「明治二十三年 0) 明治生命保険會社俣野景蔵 分である。 ま 印刷 6明治

生命保険の起原、 明治生命保険會社概況 明治生命保険會社の経歴、 有限掛金終身生命保険、 妻子の為め保険すへし、 政府ハ生命保険を奨

等の生命保険関係の宣伝記事と

電信條規摘要、

東海道鐵道線路滊車發着時間及賃金

東京所 在公廳、 在本邦締盟外国公館、 東京名勝花曆、 東京著名学校、 東京著名病院及医師、 東京著名旅館、 郵便及

等の 日用便覧とが混在しており、 宣伝と実用とを兼ねた配り物としての特色を備え、 合わせて約五十種の情報を得るこ

とができる。

所 (明治三十六年十月の 訂正九版は 熊田活版所 、同三十八年八月の 十版は 博文館印刷所) 。 治二十七(一八九四)年四月の初版、 「傳爽明治節用大全」 であるが、 定価二円。 これは先年(昭4・6)初版本の復刻版も出たが、 編纂者は博文館編輯局、 発行者大橋新太郎。 四六倍判(=B5判)一 以下初版本によって 紹介す 印刷所は東京築地活版製造 冊で明

ると、千二百頁+(奥付)四+(広告)百十二+三十八頁。 巻頭に皇居二重橋の写真や四季の景の色刷り木版画、 大日本全

図等を載せ、本文はタテ三段組。下段の本欄は

食門、衣服、 (茶之湯~玉突)、 一覧、古今名人列伝 家室、 雑種門)、 日用書簡文例 (勤王家の部、 日本禮式、 政事家之部し内外發明家列傳 民間治療手当法并看病心得、 農家心得草、肥料分析表、 11部二五八名)、 家事経済編 養蚕法、古今遊藝 (近藤芳樹編

等二十三種、中欄は

十訂版正 刺 **验傳** 館 典家 局 編 節

價 金壹四六拾錢 包

等十 税

九 種 鼇

志る

~

(佐々木信

綱)、

器及寒暖

諸 0

及手

数料

和

漢洋

年代

略

記

倉小

百

人 験温

首

略

解

和

歌

頭

Ê

欄

は

表交門、 外格 集、

日本 形 勢要覧、 外内事 物原始 東京歳 (名称門、 時 天 象 地文門 1

雑門)、 諸科学要略、 本朝大地

を意図した旨を述べ、「江戸大節用海内蔵」 に比し巻帙・ 内容とも 新して、 遙 「能く文明社會の カン K 勝 れることを謳 新事物 輯

巻頭

0 +

「例言」

(明治廿七年三月下院)で、

旧

来の節用を一

種、

総

計六

+

科

目

0

情

報

を

載

世

る。

九

版本

は、

地

圖

12

臺

轡

が

人

り、

「日本名勝案内」

が入る等の異同

があ

を

8

た

|る新節|

用

0 大成 る)。

編 箭 る に 述 用 近は趣 奥行 便 0 旨を た 0 用 深 は、 此 カン 12 5 採 科 N ょ ŋ 専 ŋ 門 は 0 科 間 事 0 口 12 事 0 最 物に 廣きに \$ 委は 就 あ て学者 L ŋ きを力め 0 乃ち之を繙 研究に供 ず L て、 するを為さず、 け ば、 廣 3 世 方般 間 万有 0 事 普通· 0 12 事、 通ず 人 をし 概略に通ず Ź K て普ね あ り、 るに 俚 森 語 あ 羅 を ŋ 万 以て 象 0 故に本書 之を 事 物 を 知 0

2 そ 0 間 口 0 広 さと記 述 0 平易さを言 0 7 V る が 田 口 卯 吉 0 日 本社 會事 彙 (明治23 1 24 # が 目 立 0 程度

は言え瞠目に値するものであった。 未だしっ その見方からすると 百科事典的 は かりとした近代的な百科事典が無かった当時にあって、 日 用語 な意味合いで使われてい の漢字表記を知るとい 「明治少年節用」 いずれにせよ本書にしても、 0 るものであって、 た 「明治少女節用」 「節用集」 本来の目的 その点、 は、 内容・ 前に紹介した年度別のものにしても、 たしかに本書の存在は通俗的、 から離れ 少年節用、 体裁共々 て、 少女節用で言ってい 「傳家明治節用大全」 諸 種 万般の 知識を得 実用的なものであると . る の少年、 るとい 「節用」 そこで言う「節 た百科 と相 少女向 通

用

五 重度生た節用集 ・通世界節用

ところで

「傳家明治節用大全」

より

前 に、

新時代

の節用、

新時代の百科をめざして編集された

版

とも言えるの

であ

る。

七 れ は (七~九九)年頃に成った好色本「今様和談色」 明治十三(一八八〇)年刊の 「羆生た節用集」 と題する小冊子である。「生夕節用」 (=「好色変生男子」) 巻四ノ一「密夫傳授之事」 という書名は、 に登場する 寛政九~十一

ば か は微細にわかち候ゆへ、活田節用じやと人いいます。の六ケ敷世話字・難字にても、早速相な物相編鳴といへる所に活田節用といへる医者はのいっぱきょ も、早速相知候ゆる。 きょくきじょいへる医者有り、 三 へるニより、 至極發明 Á V いろは分の字引・独明なる人にて、 ある名 ハ呼で、 活田を苗字とし、節用を呼名となれり、または、またり、または、はないず、此人に尋族へくわく引を見るに及バず、此人に尋族へいました。 何を尋ても知らぬ とい ふ事なし、

で使 われて 5 活いまた W |節用」 るのだが、 を思 本書の成立は、 わせ るところが たある。 或は当時文部省から翻訳 勿論 同 書 Ø 「活田 節 用 刊行されつつあった は今日言うところの 「百科全書」 「生き字引」 P 的 同じく西洋 な

「節用集」

が

あ

る。



刺激も 説、 0 年)「萬寶新書」 抄訳系統の重宝記 彗星の説、 あってのことかもしれ 地球の説等十二項に分か (万延元〈一八六〇〉 「萬寶玉手箱」(安政五 ない。 内容は、 年) そ まかの 0 説、 他 八 風がぜ 五

月中に 頃西洋にて未曽有の大砲を製り、 大きさ地珠の と工夫最中の由なりと…… ひなる火山もあり、 の 岩石・家屋のよふなるものまでも見ゆると、 これ 6 千百十一里にし は兎が のを容れて打ち放ち、 ーツ 如し の世界にて、 *杵にて餅を搗ひて居るよ 陸もあり、 て、 望遠鏡にてこれを見る時ハ、 尤とも近きものなり、そのい、月毬は地珠を距ること九 (初篇 月の世 海流 5 その弾の中に \$ 界に あ ・月輪の説 り、 5 至らし に 又た 見み ゆ め 樹 近 兀

乾坤門に当るも た説を各話に一つ宛挿し絵を入れながら開陳している。 のであるが 初篇で終ってしまっ たものらし V な その所収内容からして、 お書型の概要は次の 如くである。 本書は通常の節用集で言えば

集/賣捌所 テ 中本 活版 「廣告」と題して「政府人民のわけ」 大坂綿喜」とあり。 # 題 共 紙表紙、 目録題 朱刷り枠、 重寶化いき | 夕節用集初篇目録 「和印嬉し艸」 水色菱模様地の 等十八点の広告を載せ、 上に 内題ナシ。 「大日本加藤大先生著 尾題 「頭生タ節用集畢」。 左に 「明治十三年六月八 定價拾銭 | 頭化生 奥付 日出 た節 オ

御届 定價十銭」、ウラは 「編輯兼 出 板人 愛知縣平民加藤壽七百十六番地寄留 大賣捌 大坂心齋橋塩町角前田善兵衛一同平野町心齋橋西

同支店」とあり。全三十四頁。

「避世界節用」

紙 刷、 テ二段組二十二 また、 菊判 (明治卅二年九月 「傳家明治節用大全」 **₩** 0 一行詰、 本書は、 全二百三十八頁。 編者識)に 明治三十二(一八九九)年九月十六日 の評判に便乗して出したような書物もある。 正 價金貳拾五銭。 末に 東京 正 誤 數理学館松岡寛次郎と文魁堂青野友三 例えば 表 頁分を付す。 「強世界節用」 編輯は がそれ 數理学館編 である。 郎 輯 0 わら半

唐天竺を遠しとし たる時代には 其 八時代相 應の節 崩 あ b, 今や日本は世界的 0 日 本となりたる から 故 に、 世 界 0

微物 統學校教授 ▲第祭編 (F)日本料理(三面洋料理(三) (二裁縫三洗濯・ 本第四編 ▲第六編 ▲第弘編 極山榮次計外九名補助 病氣問答 衛生問答 家事問答. 作法問答 衣服問答 (九雜病(三0)病院 肚肥滿(三體質(五滋養食物)(二藥物看護三)傳染病(三强 柳病(二)生殖器病(三)眼科 科(四)中毒(二色膈蟲(二六花 ▲第七編、理 家庭祀者 1 1 問答 村 日を記している。 松 ▲第十編 **本第九編** A第八編)家庭理科(三)工藝理科 君 編 通信問答 諸稅問答 段中間答 戶籍問答 教育問答 版 23 。 「日本日市京東 「日本日本日本 發

> 世界節 のたり 体に通暁 用 すべ は 即 き世界的 5 時 世の 進步 0 節 用 E 伴 な 5 カン て編 る 可ら せし、 ず、

古 を 百 等の人 求めんとする、 博學強記を誇 る身を以て、 一来の事 事に 知り、 多數 便 H 世界の 實は歴史、 世 K の人は各執る所の業務 向 んとするは、 古往今來に於ける世界の出 て良好なる顧問者となり、 れ る小 事物を明らめ、 素より容易の業にあら 古記録、 數 0 世界 物 知り先生 節 工 世界の あり、 2 用 + 0 イク 目 は ず、 知識 的 暫く措 來事 口 な 日常 此

デヤ等の諸書より抜萃せしもの なれば、 記す所皆憑證あり、 但し一事物にして敷説あるものは、 彼此参照して

新聞雑誌等より随時に採録せしもあり、 今来の事柄は 尤も信に近きも アルマナツク、 Ō を 取 ħ ŋ ユースフルインフォルメーション、 然れども活世界の現状は變遷常に極りなく、 ステーツマンスイヤーブツク等を引用し、 出版當時の新事實は出版 又

従来地名、 人名、 名詞等に不穏なる譯語を附し、 稱呼を誤り、 意味を害ふを通弊なりとす、 故に、 此書に は

此等は改版毎に訂正するを期す

後に於て最早陳腐に属するなきを保せず、

等とあるが、 図版に出した表紙ともども聊か大仰な感無きにしもあらずで、 はずして原語を附することゝせり 紀元、 世界各國政体の區別、 事 物 0 起

諺(いろは別 皇朝年代記、 改正郵便條例摘要、 相撲の沿革及四十八手、 世界の七大奇観、 日本の海軍、 華盛頓首府の白館、 秘傳妙法等、 目録によれば二百十五項の雑多な情報が収 衆議院議員及撰挙者、 世界四大教主の生死、 俚

てい

け、

^{脂祭}日本家庭節用

なみに博文館も

「傳源明治節用大全」

の好評に気をよくしてか、

知新聞 久美子、 六)年一月一日に刊行している。 0 關藤國助、 「家庭顧問」 今景彦、馬上孝太郎、 に寄せられた読者の質問をもとに編集したもので、 三六判群青色クロス装の同書は、 瀬谷準造、片岡哲子、大里武八郎、 中村千代松の編。 本文は衣服問答、 佐藤得斎、 扉に 河村精八の十名を掲げる。 「補助」 食物問答、 として槇山榮次、

問答、

教育問答に至る十二篇に分け、

家庭萬重寶など六種を収録。

全千二百九十七頁。

巻頭

6

計千三百六十七の問答を載せる。 「讀者のこゝろ得」 「實驗日本家庭節用」 付録 (明治三十八年十二月 は日用書翰文例附電文例、 という書を明治三十九(一九〇 編纂者識)で 歳に時じ 作法問答~農事 と月名異稱、 報

は載され

難いが、其れを知て居ると萬事に理解のつくこと」、斯様なつて居るのですが、 そ しっ きょう ちゃっぱん はんけん しゅう はんじょう なきは一様の目的を持て居ます、一つは「其れなり直ぐと實用たらしめる こと」、本書は二様で きんき まっき

目次に分かれ、更に「目次いろは索引」と題する索引が付されているのは親切である。 と言っているように、 生活に役立つ万般の知識を得られるようになっている。 検索に便利なように、 目次が、

萬寶童子節用大成・増補童子節用集

右に見た如く、 「寶辨明治節用大全」や明治生命版の年度別節用、それに「生た節用」 や「誕世界節用」 等は、

それに対して江戸や明治初期のものであるが、

向けに編纂された書が何点かある。 例えばここにあげる「萬寶童子節用大成」がそれである。

萬寶童子節用大成

そもそもが児童向けに作られたものではない。

「明治背息往来」とあり、 寶童子節用大成/堆文堂(印)」。 に「文久元辛酉十一月改之/命澤横安江町/近岡屋八郎右衞門/同 上場町同出店」と記す。但し所載往来中、消息往来は内題に ₩, 題簽「曝陽三萬寶童子節用大成 世話千字文は末に「明治十年五月御届/金澤書林 刊記 上に「十二月異名」(目録)、下右に「十幹之図」「十二支之図」 完」。右に「合書往来」左に「用文章入」と小書。前見返し 櫻井保市壽梓、 国尽しは があり、 「明治改正國尽」 補正發行/萬 左下スミ

とある。

それゆえ、

本書の発売は明治期、

それ

も明治十年五月以降である。

丁数

前見返し十二〇八丁十奥付。

本書は巻頭の序文(加陽

探花房主人誌)に

59

「節用」を謳いつつ児童



萬寶童子節用大成・目録、 口絵

とあ

ŋ

題簽にも

「合書往来」と記すように、

既存

0

幾

0 カン

0

往

法之書なれバ。 りょと、 普く

文章に達せずしてまた。 またがら、 五常の道と大也哉。 五常の道と大也哉。

代表的 成刻」 教き を合 特色を生 録 る。 人物之画 12 中 は 商賣往来、 わ から 約 とし な往来物をまとめて一 6 世 あって計六十八種の は 編 カュ 几 干 集し 図 L 「名物往来」 て 五 おり 印が付 たも 種 が 小野篁歌字尽、 目 0 事 珍 0 録 で、 項、 L V K 7 あ V 日録 今川制 往 0 \$ 往来物が収められているということに V るも 書としたもの て本文に 0 来物や収載事 と言えよう。 北國名物往来」 原點せんじ もん 0 詞状、 \$ あり、 無く、 消息 である。 項が 世界に 但 本文と参照すると、 往 į 江戸 が、 載 来 が萬國往来」 「金澤往来」 ってい 時代に盛行 はじ 實語教、 金 澤版 8 るが、 12 لح 總 V 童さら L 「萬ばん 「未 5 た 実 な 目

引童子節用」

等が

未刻で 0

あると

いずれに

ても本書

は諸

種

往来の

既存

0 いうの

单

独

版を寄せ集めて合冊に は残念な気がする。

し

出している等、若干の齟齬を来している。

等十種余の古状をまとめて一書に仕立てあげたもので、時代が下るにつれて頭書や付録のかたちで国尽や偏冠構字尽、 六四九)年京西村傳兵衛版の「新板古状揃」を古いものとする。古状揃は、今川状、弁慶状、腰越状、大坂進状、手習状 といった代表的な往来物を何点かまとめて一書にし、「童訓往来新大成」とか 「新童子往来百家通」、「合書童子訓」等 小野篁歌字尽、書初七夕詩歌等が加わり内容がふくらんで行く。一方、庭訓往来や消息往来、実語教童子教、 しかすぎない。そもそも幾つかの往来物を輯めて一書にする形は、既に江戸時代前期からあり、版本としては慶安二(一 この 「萬寶童子節用大成」は、 明治十(一八七七)年頃の編刊本ではあるが、中身は全く旧来の江戸の往来物に 商売往来

にとっても小百科的に利用できるものである。例えば「新童子往来萬寶大全」を代表にその内容等を紹介すると、次の それを読了・参看することによって基礎的な知識を会得することができるよう配慮したもので、童子のみならず大人達

ì

大本一冊。

と題した合書往来も、

近世後期になって登場して来る。

これは、童子=寺子らが読むべき基本的な往来を一書に集め、

61

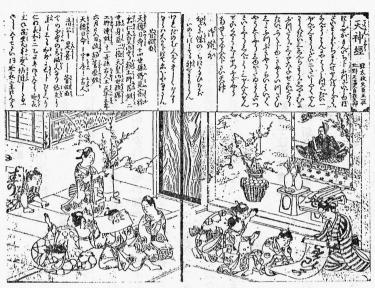
新童子往来萬寶大全

大黒が舞う正月風景、下方に て、界線を置いて左に「寛政四至年春正月吉日/大坂書肆 「急用間合即座引」「永曆大雑書天文大成」「四體千字文國字引」『急をもまただ。」だと 心齋橋南一丁甲敦賀屋九兵衞版/心齋橋南四丁甲吉文字屋市兵衞版/ の内容案内付広告があ

題簽「新童子往来萬寶大全」。全一六六丁(うち本文一六三丁)。 刊記

後見返し匡郭内、上部に恵比

新町西土砂場海部屋勘兵衞版」と刊年・書肆を示す。 内容は本文と頭書に分かれ、本文は



新童子往来萬寶大全 菅公御詠画図

日本三景、

破軍星

くりやう、

小* 登。 小* 登。 野[®] 山 だ 諸 よ

風月往来、

大日本國盡、書、腰越状、知

第五 以上見た如 十八 種 0 科目を収録する。 <

に似た内容で児童向けの は童子向けの百科事彙的な内容を有するものであったが 「萬寶童子節用大成」と「新童子往来萬寶大 「節用集」 を名乗るも 0 \$

增補童子節用集

内題 太字で 後見返し匡郭内。 小本 増補童子字盡」。 字盡大成 ₩, 前見返し 増補童字節用集」、 上部に終丁よりの 丁数 タテ三ツ割。 前見返し十九六丁十奥付。 左に 「手のすじ吉凶見やうの 右は鶏と桐の絵。 「平安書舗 菊英館」。 中央に 刊記

改正小諷

五 十 庭訓往来、 瀟湘八景詩歌

七種、

頭書

は

菅公御詠画

圖っ 平安書林寺町通三条上ル町菊屋安兵衛」 0 続 きが あ Ď, 下方右に 「童字節用大成」 とある。 本書には大坂の小島屋伊兵衛の後印本もあるが、 四 民往来」 等十点の広告。 左 に 「安永五两年二月吉辰/筆作 内容は、 まず本文が 淺田 恒

渾天儀! 圖、 地球過、 小笠原諸礼之図式、 目録の書様、 五穀并野菜字尽、 百官名尽、 増補童子字盡、京町盡、

など私算によれば三十二種、頭書が

性之事并歌

死期操様、四次がないである。 四季皇帝 占四季皇帝 占 一月異名、 篇冠 構字盡、 矢数年代記、 八等掛割之術、 金相場小割、 願成就日、 知ち

寸善尺魔 補童子字盡 四 種 まで六十二丁分ある。 0 都合五十 部 分で、 六 1 種 の情報 H ハ順、 またその前の方に「五穀并野菜字尽」「木之部」「草之部」「器財之部」「衣服之部」「魚 (巻頭 毎半葉六行、 0 目 録 12 は 鳥之部」 「都合五 行九字詰で (い)毎。 「虫、獣、之部」「家名字尽」「禅門名尽」「尼名尽」等が並むけだもの 十四 品」とある)を収める。その中心となっ の日外。如何。残去。否。 と(す) 尖の てい る の 都べて は んで 増ぎ

題 簽 名尽」 栗ゎ 0 VI るが である。 季じ たけのこ は これ 道等 例えば「五穀并野菜字尽」は 刈りが は 既に数種類刊行され 久可、 渠芋、草石蠶、 常圓、道春、浄智 防馬の ていた「萬字尽」 稲ね し、恵久、 波稜草 野の稲ね

尚貞、の百四

四

語、

麦、小麦、小麦、

蕎さ

の流れを汲むも

改正

の九十三名分の道号を収載する。 すなわち本書は、 1 П ハ分けの童子字尽と部門別の名彙である萬字尽の い両者も を参看

頭書その他を活用することによって相当量の語彙や事項を習得出来る仕組みになっているのである。

てい なお他に 子供節用集と名乗る書物がある。 るものであるが、 とある一本は、 東都 これは内題に「日用重寶万文字盡」とあって、 の山口屋藤兵衛を板元とし須原屋茂兵衛、 例えば、 先年高橋信裕氏から恵与された中本一冊、 山 実は文化三(一八〇六)年丙子六月に江戸通 城屋佐兵衛ら十一名の書林が 題簽に 加わって刊行され ¬ 改嘉 正永 一子供節 油 町

0

書林儒 に名頭文字、国づくし、 食類・降物(雨・雪・霜・霰・~沫雪・暴雨・)・時候・山類・水邊・天象之部の二十三部に分けてしょくらい ありゅう あき ゆき しゃ あられ あおゆき にくかあめ じゅう きんるい すいくん てんしゅうのぶ (仙)鶴堂鶴屋喜右衛門から板行された同書(中本、二巻二冊。 以下鳥・獣・虫・木・草花 偏構 冠字尽、百官名づくし、東 百 官、苗氏づくしの六種を載せるものである。 青物の 東物・穀物・器財・衣類染色・居所 題簽「分類早見字盡」) ・寺院に の外題変えである。 神社・神社・ 語彙を 藝げいのう 収 録 諸職・ 内容 頭書

異名」のみ。 東都の文江堂吉田屋文三郎版。 永三(一八五〇)年秋八月刊の 本体の歌字盡ともども子供を対象に編集発兌されていることが明白である。 「小野篁歌字盡大全」 前者の題簽や前見返しでは副題に「頭書子供節用集」 と万延元(一八六○)年版の 「早引節用集」 と謳 つ てお の 頭書 ŋ 付録は他に である。 両者とも 月

ところでこの

「日用重寶万文字盡」はまた、

他の書物に、「子供節用字」と題して転載されている例がある。

七 _{千金}現今児童節用 幼童節用無盡藏

見て来たわけであるが、 以上、 江戸時代に於ける合書往来や節用が童子向 「萬寶童子節用大成」 が既にそうであ けの百科事彙的内容を有していることを、 0 たように、 明治に入ってもこの傾向はまだまだ続く。 任意に取り上げて

例えば嘉

次に あげる 「一等現今児童節用」 Þ 「幼童節用無盡藏」 が かその 例 である。

千金現今児童節用

定價二十錢 終丁オに 袖珍本 「頭書畫八講釋真行千字文」 /編輯人 色刷り絵入りボール表紙、 大阪府半民伴源平一東區瓦町二丁目四十一番地一出版人 等四点の広告。 洋装、 銅版 ウに ₩ 外題 「明治十六年十二月六日版權免許」 「舊邦堂伴源平編輯/一字現今児童節用/ 同 平民此村彦助/東區備後町四丁目卅七番地」 **/同年十二月廿五** 浪華 藜光堂藏」。 とあり、 日剌成 刊記 次

十 一 丁。 二丁分が色刷り、 本書は、 以下 巻頭の 「巻中目次」 「大日本能書三筆像」 「同能書三蹟像」 「文字の起原」 「菅公之御歌並小 傳 ま で

で「大阪

児島伊兵衛/同

松村九兵衛/同

沢田幸助」以下三十九名の「賣捌書林」を細字で三段に列記する。

全四

永字八法之圖、 祝言小謡 苗字盡、 漢言解、 千字文、 新商賣往来、 扁冠 旁構字盡、 除添八葬之圖、

等五十 P 「新商賣往来」 ので、 種 (目録には「以上五十一 明治期の新しさが出ているものは、 「羅馬數字表」「筆算數字表」 種」とあるが、 「はがき用文年始状」 「漢言解」 目録にある「日之称呼」は本文中に無い)を収載するが、 7 П ハ順に二字熟字を収録。 程度である。 恰悦コブとラ 福要/アの百十 大半は旧 七

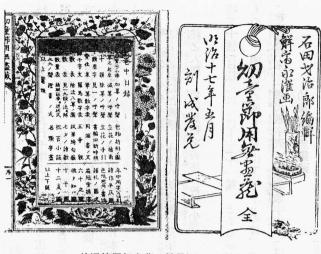
幼童節用無盡藏

全/明治十七年五月。 袖珍本 銅版 和 刊記 ₩, 終丁 題簽 す。 「明治十 紅 刷 ŋ̈́ 七年三月十三日 「幼童節用」 無輯 **二盡蔵** 出板 全。 Þ 権御 前 見 願 返 同 二年三月 紅 刷 ŋ_。 1世九 鮮富永濯 所不田才治 月 板権免許 画解輯 幼 同 童 年 節 应 用 月三十

流盡蔵

日

諸は



幼児節用無盡藏 前見返し・目録

名の書肆を掲げる。 京日本橋通二町目稲田佐兵ヱ」と「全(京都)寺町松原上ル今井七郎兵工」 刺成発免 番戸/出板人 下京区第五組大文字町十八番戸」。終丁ウは 定價二拾銭 内藤彦一京都府平民 色刷り、 /編輯人 /下京区第十三組大壽町十九番戸/発賣人 全五十六丁。 石田才次郎/下京区第拾二組元悪王子町十京都府平民 「諸國弘通書林」 として 田中治兵 0 四十

サピサピピピトット゚゚゚と題する「(い)遺・委・畏・依・」に始まり「(す八)字いろは字引」と題する「(い)遺・委・畏・依・」に始まり「(す八) でが 分が一オ~四十六ウの下段、すなわち全体の半分近くを占め、その 0 新時候」も彼の せるものがある。 今児童節用」を意識している。 であるから、 前に見た の 「現今児童節用」に一致し、「商賣往来」 「幼童節用無盡蔵」 十二支」までの四十種を収載するが、うち三十二種ま 「増補童子節用集」に於ける 殆どが重なり合うと見てよい。但し本書は「年中用 「新商賣往来」「千字文」「時候」と各々対応する は、 すなわち本書は 体裁・内容とも、 「増補童子字盡」を思 「世話千字文」 「菅原道實公之小 明らかに | 書翰旧

66

67

が、 な関与を云々するわけにはいかないが、いずれにしても、「明治少年節用」 あることを思い合わせると、 図版に見る如く、 掛け札もしくは栞ふうになっているのは、少年節用・少女節用の本文第一頁の内題部分がそうで 両者の関係を象徴しているように思える。 勿論このような意匠は他にもあるから、 「明治少女節用」 は、 如上の童子往来、 直

節用 物 英」と右横書き。左に「發兌元 中央に大きく「少年百科事彙 装一冊の本書は、 央上方に「少年百科事彙」 「二」と訂正し、各々その上に「大橋」の小判型朱印を捺す。 日発行であるが、 響作・追随作も合わせ、 の流れを汲むものであり、 少年、 東京市日本橋區本町三丁目八番地大橋新太郎、 日用品等の石版白黒図版九葉。 少女節用を出した前後に、 少年百科事彙・大正少年節用 扉が少年節用と同じく紺地に白ヌキ。 国会図書館に 献納された本では、 発行の四月の 次に紹介して行くこととする。 「著作權所有」 「定價金壹圓六拾錢」 近くは 全」、左下方に「東京 東京市日本橋區本町博文館」と記す。はじめに四季の花、 「寶典明治節用大全」の少年少女版と言えるものなのである。 次いで 博文館と小波達は、 /印刷者 「明治四十年四月編者識」 東京市京橋區西紺屋町廿六七番地石川金太郎」 博文館蔵版」と記す。 右上に「巌谷小波校閱/竹貫直人/木村小舟/合編」とあり、 まず最初に掲げるのは「少年百科事彙」である。 奥付は右方に印刷、 と各々右横書き、 何点かの児童向け学習小百科を編集・刊行してい 「四」と十八日の「十八」を、 という次のような 明治四十年四月十五 下方に 発行年月日を二行に分けて記し、 交通機関等石版色刷り四葉と、 「編者 と出し、 「緒言」三頁分がある。 木村小舟 百印 その下に 各々墨で消し「五」 刷 四六判クロ /竹貫直 同 四月十八 . る。 植 影

不肖を顧みず、 先に明治少年節用の編纂を試みた所、 意外にも江湖少年諸君の大歓迎を得て、 版を重ぬる事、

上机。 女少 共/ 君人而其竹 福/ 乔和 24 生先波小谷殿 版 K [23] 校

年 H

科 事

る事は悉く之な網額して一般に遊せり。加ふるに燈頭には梅彩色石版刷を以て天文。

風俗等の疳色真に迫るの軟葉の写真な附して口鱠とし。

歷史、科學、

産業.

本本

風俗、

遊戲、注翻日本の少年として知らざるべからざ

着手したのは、 是に於て、

實に去三十八年一

月の事であつた。

而も 彙

此 編

事

は 12

生等又大い

に奮勵し、

進んで少年

社

會事

0

學生銘打が期待指く能はざりし少年百料事業に出てたり水膏に取取する所は修具、地

の學生請打は只だ此の一発を借へて机機に綴かば、 類したる質物寫生の密度約三百個を挿入して、既明の足らざる堪を補へり、 株に本書は関定教料書の散材に爪きな記さてお明したれば 灾 恰から戯山の物を探るが 如く便利 正價豐固六拾錢が祝れ、一六頁日拾排入 故に天下

輯

内容=少女に必要なる物が見めた鮮麗な写真を二十页も採入して口細とし、水料の部

には少女の心得、日本歴史、日本地理、世界地理、少女文學、作文法、

際生緒君は勿論 此上しなき質典なりとす。

小學校就員及父兄の签書者として し亦不可然の好質無也

题 | 人夫爾公島鍋 字 | 史女子歌田下 文序史女子房腺山

化

育聚、地文、天文、 疏法、

遊戲、鏡縫、編物、刺絲、遊

植物、颜物、

所

であると同時に、

又聊か迷惑する所である。

迷惑とは

何

花。料理法。 禁辦、物理學,

衛生、家政、茶の酒、造花、杏醬、英語、農業、年事。別都の部=少女年

中行事、本花栽培、盆栽仕立法。

品與採集。

小几间我让

金瓜の飼養法、紋形、

押始

III 治 15 女 简 H 正價八十五錢//成 本紙數六〇〇五

坿

五

対伽斯、 亦十字社師便電价聚內、 桃体 笑話: 化粧法。 考へ物。同じく答、 衣類の心得 旅行心得、 置得案内, 范明 = 小女立志執(日本) 遊學の菜、 古内トひ、 于守歐、羽子與歐、 日本の政治 少女立志你(外國) 危機のお邸

液碎人舟

手輪以

博文館發行

6

ぬ

便宜を得る事と信ずる。

カン 0

谷川代打 TTTT 小笠直小 既初竹木

> 所とは あ 三年 5 た事 0 間 云 が K 七 明か 従来諸 口 に に 及 證 君 N 遊據立 等 だ。 0 間 てられ 是 に、 れ る 此 K 0 種 諸 である。 0 君 書籍の から 平 缺乏を訴 素愛 顧 0 致

す

ず、 般國 つて、 君と、 然るに社會の進歩は、 0 民教育に、 餘暇、 漸く此頃稿成るに當つて、 節 用の 文部省 豫め約した事な 所有者は已に知る所であらう 所謂分業の法に依て、 は國語 之を用る事と成つた。 假名遣を改訂 滔々として大河 のである。 初めて重荷を卸 爾来満一 し、 各自孜々として倦 これ生等 0 来る四十 如 ケ年、 < 蓋し の大に 現に昨 年か た感が 生等は 當時 to 賛 事を 6 年 0 成す 末に ある。 雑 小 知 誌 年 當 5 諸

幷記 これ 節用 鮮 \$ 他 明 索引 なし本書正に脱稿して、 がを利 は L 0 木版の 風に倣はず、 編成に際しては、 用 L 同 往 た 時に對照の便を謀る事に 0 々誤刻し易きをさけて、 で ある。 却つて別頁として巻首に添へる事にした。 主として新定假名遣に依り、 然し 今更訂正の 讀者は本文と對照をして、 L 餘地 た。 石版の美麗に寫眞版 0 無い 又挿 事 畫 であ 舊 故ら 来の る。

に \$ 尤 る

の広告七頁分あり。後出の「大正少年節用」付載の広告(図版参照)に 分。タテ二段組。一段二十行、二十三字。末に「格言三則」一頁分と奥付。 次いで五十音の「頭字索引」一頁と、五十音引きの /巖谷小波監修 / h質直入合編」と内題があって、 ア行の部 「少年百科事彙索引」九十五頁分。 ・ア アイヌーワ行の部 奥付のウラから「明治少年節用」第五版等 本文は、はじめに「少年百科事 ヲ ヲヤママチまでの七百七頁

天下の学生諸君は只だ此の一巻を備 ても亦不可無の好寶典也。 殊に本書は國定教科書の教材に重きを置きて編輯したれば、学生諸君は勿論、 へて机邊に繙かば、 恰かも囊中の物を探るが 小学校教員及父兄の参考書とし 如く便利此上もなき寶典 なりと

年節用に比し詳しくなり旧来の節用離れをしている。 と宣伝しているように、たしかに本書は五十音順に項目を配列し、索引も備って検索し易くなっており、説明内容も少 が、それでも

少年世界編輯司編

東京 博文館藏版

世此事絶えたり。

大正少年節用

我國にては上代よりの風俗にして、既に神武紀に見ゆれど、後アクシユ[握手] 男女手を握りて約束する事、歐米の禮式とす、を赤本と呼ぶ、其作者には觀水堂丈阿なる者あり。 アカホン〔赤本〕 小説本の一種、貞享の頃草双紙出版の始め、アカホン〔赤本〕 小説本の一種、貞享の頃草双紙出版の始め、

等という今日から見れば不確かな記述も混在している。なお、書名

は Ú١ は 富 Ш 房 の Ħ 本家 庭百 科 事 彙 朗 治 十 九 生)を意識 L て W る カュ لح 恵 わ れ

大正少年節用

文館印 版 三六 内題 判 刷 東京市日 所 「大正 / 發兌元 本橋區本町三丁目 他クロ 一少年 節 本町 三 用 八番地大橋新 ₩ 丁本 奥付 置博文館」。 屝 太郎 Ħ 「大正三年十二月五 地 に 餇 (朱刷 中央上部に 刷 枠、 文字 東京市小石川區久堅町百〇八番地高橋季吉 「大正少年節用 は H 黒 印 刷 緑 色。 /大正三年十二月八日 「少年 世 昇 權 編輯局 游有 一印刷 編 /定價金壹 L發行 / 大正 所 ノ編者 莎年 直 東京市小石川 節用 少年 [區久堅町百〇八番 世 東京 博文館

は 前 に 出 た 明治少年 節 用 の 大正 版 と言うべ きも 0 内容 . 体裁 でとも 前 者に似る。 但 「緒言 (大正 年

-一月 編者識 緑色刷)に

ず、物質上に齎らす影響も甚大なるには相違ないが、その思想上に及ぼす變化は絶大なるであるととなった。 第三期を劃すに至つた。 即ち今次の大戦は、戦後に於ける世界地の歐洲大戦によつて、第三期を劃すに至つた。 即ち今次の大戦は、戦後に於ける世界地界地域が大戦にの文運は、明治世七八年戦役に於てその第一期を割し、同三十七八年戦役に於てその第一期を割し、同三十七八年戦役に於てまたとは、またが、またが、 人なるも 地圖上の變化は五、第二期に入り、 のが あ る で 更に あらうと 更に今囘 も云は

し 物の知が 東京は最高の ・ でである。 ・ でである。 ・ でである。 ・ でである。 ・ でもいである。 ・ でもいでもいる。 ・ でもいる。 ・ でもい。 ・ でもいる。 ・ でもい。 ・ でもいる。 ・ でもい。 ・ でもい。 ・ でもいる。 ・ でもいる。 ・ でもい。 ・ いった。 を いった。 いった。 いった。 いった。 にった。 に。 にった。 にった。 にった。 にった。 にった。 にった。 に比して、 て、 考へる。 聊か抽象的に 流流 れ た んやう ぎ を聯 iz ん事を期した。これぎ、これが補習參考を聯ぬるばかりで ん っぱぁ な つ て、 8 % 最も新ら ある

大だう アなる効果を諸君のため、定義や原理の うと思 やを教科に譲 の上に齎らすであらう、 つて、 寧ろさうした新らし 況や本文に挿入せる圖畫及び寫眞版は、辭句をいせるは、 すったおま しゃしばん じょうさうした新らしい學説に準據したと云ふ事が、っさりした。 また かくせつ じゅんきょ のを補ふに餘れい、補習參考の の。上き ŋ 5 るも に、 VI

カン

0 7 るように、 明治少年節用に比べ精 度は増 L てい る。 例えば比較する意味で天文篇1 星 を出 世

天だれば しく、 に變じつゝ、運行するものとの別、仔細に観測せば、各星夫れぐんでは、それには、月の如き太め。天文をとしては、月の如き太め。天文をとしては、月の如き太め。天文をないない。 れ 人は之を呼びて星と云ふ。 て雲なき一 で 付 自^しの 地^ちて*體: 球 素漸 よ に

しく遊星の一つである。

姿颯爽」 じめ とあ 它 0 て、 (東宮殿下御肖像)、 歷史時代 大仰な書き様ながら説明は詳しく 風 俗」 等 の 「日本三偉人」 石版色刷 り四 葉、 伊い なってい 藤博文 次 VI る。 で .

英礼 は

和漢文選

大正少年節

用

和文之部

刻'

状風に、様はすこし遊けれど、 源のない 緒言が 平心郎 勅語、 乃木希典)、

天皇御歴代、

合わせて八頁と続き、

二十頁分の

「日本海陸軍の活動」

等の写真十二

葉。

文 E

可以

— 71 —

部では「大正少年節用は實に(徳川の臣二人)」という問に対し明治少年節用の場合と同じように部では「大正少年からなせつよう」と、 しょくばは しんなたり **團子=日本一)、ミの部では** 音順)、 別科は不思議世界、 目次があって本文に入る。 る等の遊びを混えている。 地文篇、 年歴史こよみ、 以下歴史、 日本戦争譚、 常識と雑話等十三種。 地理、 また、 本文は明治少年節用と同じく本科と別科に分かれ、 「三田の学校」 博物、 郊外散歩の栞、 奥付ウから七頁に亙る広告では 数学、 に対し(大版の罫紙=けいおう〈慶應〉、 理化(目次 その 博物叢談、 うち5「繁福引材料」(五十音順)の 「理科」)、文藝、工業、 欧州大戦の原因等十二項、 「少年百科事彙」 商業、 計五百八十頁分。 6 「明治少女節用」 農藝、 「考へ物」(イロハ順)の ハの部では **鼇**頭は和漢文選、 軍事、 に「伊井、 「博文館」に対し(黍 本科は発明篇、 修身篇の十四 の各五版等が宣伝 本多」と答え 格言集(五十 天文

九 少年百科寶鑑・二十世紀少年新節用

されている。

世紀少年新節用」等がそれである。 ところで「少年節用」「少女節用」 の 売れゆき好調を見てか、 両書の追随作も登場して来る。 「少年百科寶鑑」、「二十

少年百科寶鑑

発行元として岡田文祥堂書店のみを出している(七三頁図版参照)。 Ŧi. 賣 一日發行 完 三六版 東京本石町至誠堂書店 定價金壹圓 ₩, 内題 /著作者 「少年百科寶鑑 /関西發賣元 濱野知三郎/發行兼印刷者 /濱野知三郎著」。 大阪備後町吉岡實文館」。 奥付 東京西大久保山本完蔵、 な 「明治四十二年一月二十日印刷 お、 はしがき 後出の (明治四十二年一 「二十世紀少年 /發行者 大阪備後町岡田菊二郎 月 五 新節用」 /明治四十二年一月二十 Ħ 巻末の 東京西大久保の 広告には /関東發

僑居に於て K 分か れ る。 頭 著者しるす)。 書 は 祝 日大祭 巻頭 H 0 12 解 総 目次十八頁分。 處世 0 礎、 事 物 本文は全七百四 起原など三 干 種 7 六 頁。 修 身科、 語 科 1 英 語 科 ま で の二

+

五

十世 紀少年 新節 用

完蔵 論 店 治 扉 四 小三六判 濃紺刷 関 十三年一 註 大 保 四 下 京 府 府 釋 西 回發賣 り、 [百五十九番地] 一段行者 月二十 ₩, 元大阪市 「教育講究會編纂/世紀少 Ш 竪一 本文友堂と岡 I座大阪四-中東區備後 日 印刷 五一、 明治四 番目 横九 田文祥堂の二 寶文館 糎。 一十三年一月廿五 書 年新節 濃 店 岡 紅 田 色 ٥, 書 菊 用 ク す 店 ロ /大阪二 な 0 郎 ス装に白 刊 日發行 わ ち、 行物 大阪市東區備後町五丁目八番屋敷/ 書 前 一房藏版」。 の 緑 広告が 出 定價金五拾銭 色で 0 7 各 小 内題 1 年百科寶鑑」 H ガ ある 世紀少 V ツ 編纂者 1 関 年新節 0 東 裾模様。 と同 一發賣元 教 用 じ発行者、 育講究會 /教育講究會編纂」。 背文字金、 振東京 中 市 一人發行兼印 座日 発 是東京 東京 本橋 區 売 表紙 元 七本四石 四町番 巻末に 刷 書 奥付 名は 至 誠 白。 堂 コポ トケ Щ 明 本

はその 「はしがき」 n ぬ のとし正月 著者の一人しるす)で

(振 替 D 座 大阪五二二八番) 大阪市東高備後町御堂筋四入 百 濱野 知 三 那先生著本居 豐 紅先生題詠東久世通禧閣下題字 科 阎 盤 Ш 錢形方長六四 邢一全 行赞堂群女 て、何よりも生まだ小學校の呼 て、 科が語でもに、角 者者わ凡てゞ六人、ないない。またれて、随分の苦心を重にたづさわつて足 角この 準は場合にある てゞ六人、 理り冊き の門に 心を重ねったと 科か そ をこしら 0 範は地が、国が、 通うて ねたこともないでわあ 目め L か れ を から外れ え る人にも、 歴史と、 楽を居り あ げ 文章の まし れ ま ない る の少年諸君の

した。

總さ

調学で

それが

れ

4

に

ŋ

ま

世

N

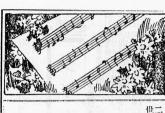
、疑わしいところわ問合せ いようにと、現在、教育の いよが、 をはない。 をはない。 ではない。 でいるが、 でいなが、 でいなが、 でいなが、 でいなが、 でいなが、 でいなが、 でいなが、 でいなが、 でいなが、 でいなが、

める繪

思業

下殿三孫皇 覽 御 賜

東宮侍講文學博士



他二 紀十 少 红 新 節 用

敦 育 講究 會 編



て居ら N から、 達にわ、

っているように、 但 L ま 挿し絵 た同 じ . 挿図が多く、 はしがき」 で やさしく説こうとしている 「どのペ 1

鶏卵わ水の中で浮くものでないが、 ドウすれば鶏卵 が 水 が特色でもある。 るつもりで、

例えば理科の7と8を示すと

著者わ夫れぐ、苦心しました」と言

修

9

流に 云

必ず 拍手喝采を受けるでしよう。 密を能く心得て後、諸君わ多くの人 密を能く心得て後、諸君わ多くの人 かはち(ママ)はくしゅかつき、 し藝を一つ御覧に入れますと云つて、

諸君わ多くの人の居る

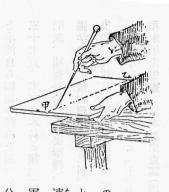
るもので

ある。 やつて御覧

通り、 甲から乙に一つの線を引き、やすりを以て甲の處を少し傷つけ、さて赤く焼けきつたる火箸を以て、静いが、からないます。先づ一枚の硝子を用意する、さてその硝子を假に二つに切ろうとするには左のば、やと、こと、 また ボラス ようじょう のドウすれば火箸 で 雅子が見れる乎

假名づかい、 なってわ、 讀 讀む人も讀み憎くかろうと、一人で筆を は、 ひと は にく まし

々と言っているように、 拠っているわけで、 にわ、それの方が讀み易いと思いましたから。にら、總てをお伽噺の大家巌谷小波氏が近頃使つなり、と、。 される假名遣に従いました、まだ年のいかないかができた。 という はいかい できた しんができた しんが できた しんが かった しんが かった しんが あんしゃ まだ確固に定つて居ませいがい、それも今も、まだ確固に定つて居ませいがい、それも今も、まだ確固に定つて居ませいがい。 内容も推して知るべしである。 仮名遣表記 カン ジにも繪畫を入 らし て既に小 たから。 かない 波



る、三つに切り、四つに切るも、皆同じ方法にすれば宜しいのです。かに甲の傷から乙に至る線の通りに線を引くと、それで思い通り二つに切れかに甲の傷から乙に至る線の通りに線を引くと、それで思い通り二つに切れ ま

軍旗、 速度し動物の寿命)、 分。 と頭し鼠の相談 の如くである。本文は修身、国語、算術、 広告中には濱野知三郎の 軍人、稲の刈り入れ等の口絵三葉、はしがき二頁、目次十四頁、巻末広告十六頁 九話)、ワシントンの五徳、 「少年百科寶鑑」を含む。 理科、地理、歴史の六教科、頭書は童話(尻尾 手紙の認め方、 なお本書には明治四十三年二月 九九の聲、 別に巻頭に石版色刷りの 記臆帳 (物體の

十五日の再版(=再刷)本もある。

用 少年節用」、「明治少女節用」に類似し、また少年實鑑の方は、書名や口絵等、 ている。「瀕日本少年寶鑑」と「新日本少女寶典」である。 さて小波は、「明治少年節用」「明治少女節用」以後、 に倣っているところがある。 博文館ではなく別の出版社から同じような企画 仔細に見ればそれなりの差異はあるが、 浜野知三郎のそれや「二十世紀少年新 両者とも各々 0 6 のを刊行し 「明治

撰日本少年實鑑

鑑 小三六判一冊。「二十世紀少年新節用」と略同じ大きさである。 小と記す。 内題 本文第一頁上部に 「羆」日本少年寶鑑」と右横書き。 扉白地に朱刷り枠。紫色の行草体で 「瀬日本少年寶 奥付 明治四十四年三月卅一日印刷 ノ明治

四 南小田原町二丁目九番地中野鉄太郎 紙片が貼付され + 应 年四 月三日 ってい 一發行 (国会図書館本による。 る 正價金壹圓 /(下に 「印刷所 也 /編者 同本では 東洋印刷株式會社」 巖谷小波/發行者 卅一 と四月三日の と右横書き) 東京市神田區錦町二丁目三番地岸野英) 發兌元 四 と「三」の部分に青ゴ 電話 本局百二十四番 文王東京市神田區錦町二丁目三番地文王 印 刷 - ム即 を捺 した

書は現代少年 の自修用に供 、せんがために、 最も平易簡

はじめに朱刷りの「凡例」

(明治四十四年学年末

編者識)が

崩

E

記述し

發

此

の

·寶所振替貯金東京二百六十番 勉強堂書店」。

されば本科には、 用意である、 である。 又鼇頭の材料は、 本科 なるべく挿畫を豊富にし、 は 小學生 の ため、 一般家庭團欒の資料に充つるのが、 補習科は中學入學準備 補習科に於ては、必ずしも多くの畫を入れなかつたのである。 主として中小學生に適切なる科目を選みて、 者、 及び實業補習學校生徒の、 編者の希望である。 参考たらし め んとて 又本 編

...述は主として木村小舟氏の手に成り、 仕組みに就ては、 編者の大に苦心をした點も少くはないのである。 只算術科は竹貫佳水氏、 英語科は長井青郊氏の筆勞を俟つた。 而して其

と小波自ら

集の経緯を語

ってい

る。

に戦争や脱穀の図等色刷り口

凡 例

頁。

目次は鶯緑色刷

り上下二

段

三十七頁。 笑話三十題、 補習科(戊申詔書奉釋)、 本文は本科と鼇頭に分かれ全八百五頁。 編 豫習讀本の十九科、 本邦高山 と「小学唱歌集」 式日及記念日、 覧、 れ 頭の 謎々三十題、 巻頭 部は童話三十題(犬と影~藪醫の蛙)、 (舟遊しかぞへ歌 實業手引(農業部)、 福引五十題、 本科は修身科、 学校新聞材料、 工業、 歷史科以下、 1絵四葉、 商業、 東西少年逸話 少年俳句、 英語、 地理、 法制一 作文、 考物五十題等四 (森蘭丸 班、 理科、 軍事 1 北 算術、 條時宗)、 班、 干一 圖 救急療法 種 昆蟲採 中

和永年先生畫

日本歴史畫譚(増補四版)」

等の広告三頁分。

四

十八曲)を含むのは新趣向。

末に

「上田萬年先生解説

名

「高等小学讀本字引」

日本少女寶曲

言 行 共編/縣日本少女寶典 丁目十二番地」 市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 (明治四 定價金壹圓 十五 と右横書き)/関西發賣元 紺地ク 五拾錢 年桃の月 / 東京 П / 著者 ス装、 / 發行所 編者 誠文館蔵版」とあり。 金で百合の花を捺す。 巖谷季雄 :識) 振替貯金口座東京第六九九番東京市神田區南乗物町七番地 大阪市東區備後町四丁目 /沼田藤次 教科書以外の 奥付 /發行者 背文字金、 誠文館/(下に 吉岡寶文館 明治四十五年三月二十 田沼秀夫東京市神田區南乗物町七番地 小口は赤紅染。 神戸市元町通五丁目 「印刷 所 屝 -日印刷 會社秀英舎第一工場東京市牛込區市谷加賀町株式秀英舎第一工場東京市牛込區市谷加賀町 白地に行草体、 吉岡實文館支店」。 **/明治四十五年三月廿五** /印刷者 黒文字で 飯田 巻頭の 三千太郎 , Г**巖**谷小波 日

子高等師範附属高等女学校等の写真四頁に続き、 云 マと、 野の b その 編纂目的と執筆者について記してある。 少女節用と同じく権威づけを図ってか、 石版色刷りの 中 ・略)本書の編述については、『少女フラーの参考用、または自修用として、少女にの参考用、または自修用として、少女に 口絵(婦人風俗、 髮型)四葉、 は、『少女フラワー』の著者小として、少女に必須な学塾、ないなりない。 序が二つ(一は「明治 皇太子妃殿下、 四 東京女 干 Ŧ.

本文は 皇后陛下十二徳の 一霞立ちそむるころ 「本欄」 が修身、 御 国語 詠 三輪田眞佐子」、 皇室、 (文章作法) ~活花、 皇族 覧、 は 天皇御歴代、 明治四十五年二月 割烹、 家事経済等三十一門六百三十六頁。「上欄」 計二十頁分と続いて行く。 下田次郎しるす」) 七頁分、 次に目次が二段十四頁分あ 次いで緒 が少女美談、 言 勅 浴語、 少女 詔

案内、 お 伽 少女夢判じ、 (八日本 'n 部 郵便電信案内等三十一 か ぐや姫し清子の鼻 種。 八話、 巻末には小波の 介西洋 .. 部) 踊り靴 「少女對話選」、 一自ばらと少女 笠峰の 七話)、 「少女十二物語」、 少女遊学案内、 小野 小 女子職 峡



少 女 美 談

時本切様に死に別れせした。 毛利元次の女は、七才の ▲毛利元次の女 n n

修

14

14

れている書物も、

っているような感がある。 沼田笠峰 内容は 小 明治少女節用」 野小峡流というわけか、 前者とちがって教訓・修養書 上欄の9「讀書の栞」 に似るが、 柔かく懇切丁寧に 教訓を説く調子が、 辺倒では K あげら

な

少女フラワー」等の広告十二頁分がある。

なく、 「小波お伽百話」 「お伽七草」「少女對話選」(以上小

峰)の他、若松賤子の「小公子」「忘れがたみ」、「一 波)、「少女スケツチ」「少女百話」「少女十二物語」(以上笠 葉全集

学校卒業後に讀む方が、 蘆花の 「不如歸」 わかりやすくもあるし、興味も深からうと思ひます」 に続き紅葉の「金色夜叉」もあげられているが、 「この と

但 し書きがある。 小説も前の『不如歸』

と同じやうに、

等が内容案内つきで推奨され

ている。

なお、

少女英族

A

類を、 来、 12 の他に、「二六節用」、 ついても云々すべきであろうが、 以上、「明治少年節用」「明治少女節用」にはじまって「撰日本少年寶鑑」「親日本少女寶典」 大雑書につらなるような書物はまだ他にもある。 その周辺を含め見て来たわけであるが、 「挿繪節用」 (昭16)、 既に紙数も大幅に超過してしまった。ひとまず筆を擱くこととする。 「挿花草木節用」 最初に記したようにこれらがすべてではない。 例えば節用を名告るものも、 (昭27)といった、 特定の分野に関するものもある。 総合百科的 に至る児童向けの啓蒙 な内容を盛り込んだもの 江戸期の節用や合書往 それら